

目黒都税事務所長賞

税金が支える自立への一步

目黒区立第一中学校 三年

瀧岡 もも香

私の祖父は、今年で八十八歳。二年前に祖母が亡くなり、それから一人暮らしした。祖父は昔から元気な人で一緒に食事をしに出来たりもしていた。しかし、一年前に突然倒れ、心臓にペースメーカーを入れる手術を受けた。このとき、障害者認定を受けたことで、タクシー券が無料で配布されるようになつた。祖父の家の近くにはバスが通っていないようで、移動手段は限られていたが、タクシーを使えるようになつたことで、病院への通院がとても楽になつた。

また、祖父は高齢であることから、介護認定も受けた。その制度を使って、自宅の階段に手すりをつけたり、浴室の段差をなくしたりといった工事が行われた。それによつて、祖父は階段の上り下りや入浴も安心してできるようになつた。

私の母や叔父は、交代で祖父の家を訪れて、様子を見に行つている。しかし、最近は、祖父が自分でできることが増え、以前よりも元気になってきた、と母から聞いた。それが自信にもつながっているようで、表情も明るくなつたそうだ。その結果、今年度の介護認定の等級が「自立した生活ができる」という理由で

以前よりも軽くなつた。家族が見守る負担も減つて、祖父も私たち家族も前向きな気持ちになつていています。

こうした支援は、すべて税金によつて支えられているものだとということを知つた。障害者のための助成や、介護保険による住宅改修など、普段あまり意識することのない税金が、身近な家族の生活をこんなにも支えてくれていることに驚いた。さらに、それはただ「もらつていい」だけの支援ではない。祖父のように、支援を受けながらもできることを増やし、自立した生活に近づいていく、という前向きな変化が生まれている。

「税金」というと、「取られるもの」、「難しいもの」といったイメージがあるかもしれない。しかし、私の祖父のよう、困っている人、助けが必要な人の生活を支え、自信や元気、勇気を取り戻すきっかけをつくってくれる、大切な役割を果たしていることを、今回の経験を通して実感した。税金は社会の誰かの生活を守り、支えているのだ。そして、それは家族や地域全体の安心にもつながつていて。

今、私たち中学生はどちらかというと、教育などについて、税金によつて支えてもらつていてる側だと思う。これから大人になつて、自分も税金を納める側になつたとき、ただ義務として納めるのではなく、「誰かの助けになつていて」と思つて納めたいと思う。この先社会を支えていくのは私たちだ。だからこそ、税金の使い道についてもっと関心を持ち、社会の一員として、自分にできることを考えていきたい。